

ID 学習者のための ID ポータルサイトの構築

Construction of ID Portal Site for ID learners

岡本 恭介 鈴木 克明

Kyosuke Okamoto Katsuaki Suzuki

岩手県立大学大学院ソフトウェア情報学研究科

Graduate School of Software and Information Science

Iwate Prefectural University

ID 学習者のために、ID ポータルサイトを構築した。ID とは、インストラクショナル・デザイン (Instructional Design) のことで、効率よく効果的に教育目標を達成するための手法である。そして、ID ポータルサイトとは、ID を学習する人たちのために役立つ情報を含んだサイトである。その情報とは、Web 上にある論文やツール・教材などを含んでいる。本稿では、この ID ポータルサイトの構成やその中身について紹介する。

キーワード：情報検索 遠隔教育 情報管理 インストラクショナル・デザイン
ポータルサイト ID

1. はじめに

インストラクショナル・デザイン (Instructional Design: 以後 ID) とは、『教育を効率よく効果的に行う手法』(教育工学事典 2002) のことである。この手法は、学校や企業内教育など、教育活動が行われている場所で使われているものである。

教育活動の中で、特に最近注目を浴びている分野といえば、e-learning の分野であろう。e-learning とは、『情報技術によるコミュニケーション・ネットワーク等を使った主体的な学習』(ALIC 2002) のことである。e-learning はコミュニケーション・ネットワークを使った学習のため、体系的な手法である ID は有効だとされている。鈴木 (1998) はコミュニケーション・ネットワークを使った教材を作成し、有効性を確かめた。それは、ID の手法を使って作成したドリル作成支援ツールを使って作成した教材は、使わないで作成した教材より効果が見られた、というものである。以上のように、ID は教育活動の場で使われており、その有用性も確かめられている。

一方、ポータルサイトとは、『インターネットの入り口となるサイト』(ALIC 2002) のことである。現在、ポータルサイトの運営は

広告収入依存型のビジネスモデルによるものが多い。しかし、広告収入依存型ポータルサイトとは異なる、特定のユーザ層を想定したボランティア運営のポータルサイトが増えつつある (ALIC 2002)。そして、香取 (2001) はポータルサイトの必要性を、同期型学習システムやオンライン・テストなどの学習方法と、それに対応したコンテンツを管理するため、と言っている。つまり、学習者の欲しい情報まとめることで、学習者が迷わず学習ができ、他の Web サイトを探す必要がなくなる、ということである。そのため、ポータルサイトは有効であると思われる。

本研究では、以上のような理由で、ID 学習者のために ID ポータルサイトを構築した。本稿では、この ID ポータルサイトの構成と今後の課題について記す。

2. ID ポータルサイトの構成

2. 1. 概要

ID ポータルサイト (図 1) は岩手県立大学の教育情報システム学講座の Web サーバ上にある Web サイトのことである (<http://www.et.soft.iwate-pu.ac.jp/edutech/id/>)。この Web サイトにあるコンテンツは「目的・概要・使用法」「論文・書籍等」「ツ



図 1：ID ポータルサイト・トップページ

ール・教材集」「用語集」「リンク集」「Q&A」「掲示板」「English ページ」である(2002/3/5 現在)。

2.2. 全体構成図

当サイトの全体構成図は図2に示した通りである。それぞれのページは左右のフレームに分けてあり、それぞれのコンテンツに移動しても、他のコンテンツに移動できるようになっている。ただし、「教材集」(図3)だけは「ツール・教材集」という Web ページからのみ行けるようになっている。また、論文やツール・教材等は見やすいように全画面で表示するようにしている。

2.3. 各コンテンツについて

ここでは、当サイトのトップページと先述したコンテンツについて、それぞれ概要・目的を記す。

- トップページ

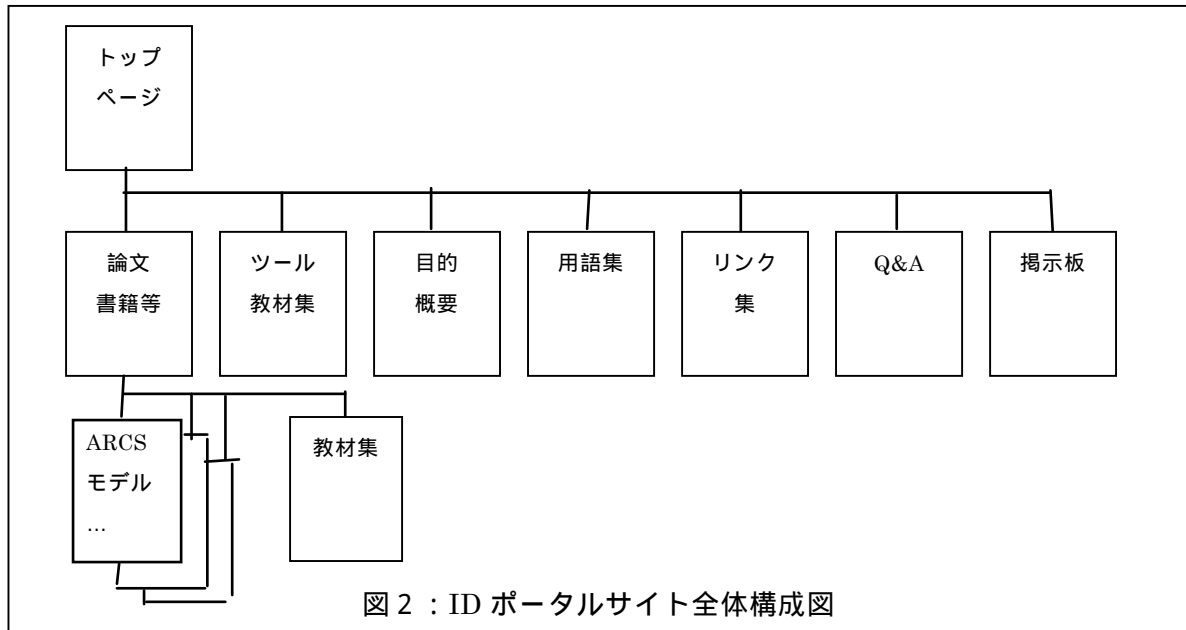
このページには、見に来た人が混乱しないように情報を少なめに載せた。載せている内容はリピーターのための更新情報と、初めて

来た人のために用意してある情報である。例えば、初めての人は「ID ポータルサイトの概要・目的・使用法」へ行くように誘導をしている(図1)。また、更新した情報にはリンクが張っており、更新した情報をすぐに見ることができるように配慮した。

- 目的・概要・使用法

当サイトの目的や概要、当サイトにはどのような情報を載せているか、ということを記してある。また、各コンテンツの概要・目的についても記してあり、当サイトが一覧できるようにサイトマップも載せてある。ここで言う、当サイトの目的とは「ID の学習者が ID について学ぶことを支援する」ということである。そして、具体的には学習者に次のような学習効果をもたらすことを目的としている。

- ・ ID の概要・定義を説明できる
- ・ ID のモデルの例を出せる
- ・ ID の活用例を出せる
- ・ ID の有効性を示せる
- ・ 授業事例・教材を ID の視点で捉えること



ができる

- ・ IDを活用・応用できる

そして、これらの目的に則した学習者別の使用法も記してある。概要・目的という情報を載せることで、当サイトにきた人が自分の目的にあった情報がここにあるか、ということがわかるようにしてある。そして、使用法という情報を載せることで、自分の欲しい情報にたどり着きやすいようにした。

- 論文・書籍等

インターネット上のIDと関係のある論文等の情報を閲覧することができる。当サイトに来た人が自分にあった情報を選択できるように、いくつかのカテゴリーに分けている。それらのカテゴリーとは「ARCSモデル」「ガニエの9教授事象」「情報教育」「総合的な学習の時間」「教材設計・開発・評価」「マルチメディア学習環境システム設計・開発」「ドリルシエル」「放送教育」「インターネット」「授業設計」「教育・授業評価」「研修」である。現在(2003/3/5)載せてある論文等の量はのべ235項目である(ひとつの論文に複数のカテゴリーを含んでいるものもある)。このようなカテゴリーになった理由は、研究室にある情報を単純に分類したためである。それぞれの情報には、種別・作者名・発行年・概要等が記されており、発行年の新しい

情報から順に載せてある。また、教育情報システム学講座の研究室内サイトと研究室外のサイトと分けて、情報を掲載している。

- ツール・教材集

インターネット上のIDと関係のあるツール・教材を集めたものである。ID自体を学べるツールやIDを使って作られたツールなどがある。これらのツールや教材を見たり、使ったりすることでIDの知識を養うことができる。これらも「論文・書籍等」と同じように、制作者名や概要等が記されており、研究室内・外に分けて掲載している。また、このWebページの中には、鈴木(2002)をもとにして作成した教材集も収めてある(図3)。これらの教材はIDの手法を使って作成された教材のサンプルとして掲載した。

- 用語集

『教育工学事典 2000』にある、IDのモデル(p.29)とさくいん(p.581-582)を引用し、それらを載せた。また、各用語の意味は、その意味が記されてあるWebページにリンクを張った。

- リンク集

IDと関連の深そうな学会やWebサイトに対してリンクを張った。学会、研究室、個人



図3：教材集のページ

等のサイトに分けて紹介してある。また、それぞれ紹介しているサイトには説明をつけており、サイトの概要が分かるようにしてある。

- Q&A

IDに関する疑問とその答えについて記してある。また、それぞれの疑問に対して理解を深めるのを助けるために、参考文献も紹介してある。

- 掲示板

当サイトに関する意見・疑問や、IDに関する情報交換の場として設置した。一目でわかるように、題名だけを表示している掲示板を使った。また、内容をキーワード検索することもできる。

- English ページ

当サイトを海外の人たちにも活用してもらおうと設置した。

3. まとめと課題

本研究では、ID学習者のためにIDポータルサイトの構築を行った。

今回はインターネット上にあるIDに関連する情報を集め、それらをカテゴリーに分けて掲載した。しかし、研究室内の情報を単純

に分けたため、IDのモデルに沿った分け方ではなかった。今後は当サイトにある情報を吟味し、IDのモデルに沿った分類に変更していく。そして、さらに情報量を増やしつつ、それぞれの情報を全文検索する機能やキーワード検索できる機能を盛り込むつもりである。また、各目的に合わせた情報を提示する機能も入れる予定である。

参考文献

日本教育工学会編（2000）「教育工学事典」実教出版

先進学習基盤協議会（ALIC）編著（2002）「eラーニング白書」オーム社

香取一昭(2001)「eラーニング経営」エルコ

鈴木克明（1998）「HyperCard上のドリル教材作成支援ツールの開発研究～教材設計モデルを用いた評価と使い易さの評価をもとに～」『日本教育工学会誌（日本教育工学雑誌）』22(1), 43－55

鈴木克明(2002)「教材設計マニュアル—独学を支援するために—」北大路書房